
みるくここあ

天然水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みるくここあ

【Nコード】

N3384B

【作者名】

天然水

【あらすじ】

あたし、佐倉由香里は通常の男の子より男前な性格をもつ、女子高生！だからいつも学校の不良との喧嘩の日々…とうとう、好きな人にもフラれて更に学校を退学！？そんなあたしはひょんなことから超セレブ学校に入学！その名も「聖星羅学園」。しかもそこで出会ったイケメン兄弟と同居生活！？一体どうなっちゃうんだ〜！

第一話男前女子高生、由香里、聖星羅学校入学します（！？）（前書き）

どうも。天然水です。

このたび、みるくここあ を更新しました。

この話は超男前な女子高生、由香里がひょんなことでセレブ学園に入学してイケメン兄弟二人と同居生活を送りながら、友情、様々な学園でのお悩み解決、そして二人の間での恋愛や…と、いうわけでこれからよろしくおねがいします。まずは第一話をご覧ください。

第一話男前女子高生、由香里、聖星羅学校入学します（！？）

ある女子高生が街中を歩いているとき：「ドンッ！」と何かにぶつかった。

運悪くそれは不良グループの一人だった。

「いつてえなあ。どこ見てんだ？このアマ。」

不良グループは女子高生の襟首をつかんだ。

「ご、ごめんなさい！」と、女子高生がぶつかった衝撃でバックから零れ落ちた財布に不良グループは目をやった。

「へえ。これ、治療代にもらっておくね。お嬢ちゃん。」

そういつて不良グループが去ろうとしたとき：

「だ、駄目！返して。」と女子高生が取り返そうとした。

「うつせえ。」

不良は女子高生を突き飛ばした。

「邪魔なんだよ。死ね。」不良が女子高生に殴りかかってきそうになった時：

「アチヨ〜！」

何者かが、不良にとび蹴りをくらわした。

「しゅたっ！」

「うわああっ！大丈夫か？」

何者か：女子高生を救出したのは正義のヒーローでも白馬の王子様でもない。むしろそれっぽい男前な女子高生。それが佐倉由香里だった。

「てめえら、女相手に卑怯だぞ。そんなに金がほしいなら自分で稼ぎやがれ。」

由香里は不良グループに向かって「ズビシッ！」と指をむけた。

「く、クソッ！覚えてろよ！」

いそいそと帰っていく不良グループを目の前にして由香里は

「もう忘れちまったぜ。バーカッ！」

と言葉を吐き捨てた。

「大丈夫か？」

由香里が近寄ると女子高生は

「大丈夫だよ。ありがとうね。由香里。」

とニツコリ笑った。

そして次に…

「由香里って、やっぱりかっこいいね。」

といった。

ところが、この言葉は由香里にとっても最悪の言葉であった。

由香里はずーんと落ち込んで膝をかかえた。

「そつだよ…どうせあたしは男前さ…」

「ご、ごめん。何か気にさわること言っちゃった!？」

由香里は女子高生をじつと見つめた。実は今日…

「由香里。見て見て。高原先輩よ。」

由香里は大好きな高原先輩をじつと見つめていた。「実は今日…告白しようと思うんだ。」「ええ〜!由香里ってばすごい。」

友達はもちろん、由香里を応援した。

そして高原先輩がテニスコートからでてくると、由香里は高原先輩に告白しようとした。

「あの…高原先輩…」

ところが、タイミング悪く、不良グループが来た。

「オラァ!佐倉ぁ。今日こそ決着をつけてやるぜ。」

「この前のお返しがまだ済んでなかったよな〜?たっぷりお返ししてやるぜ。」

不良グループが来たことに皆ざわめく。

「キヤアッ！こわい。」

ところが由香里はそんな不良グループの気迫にも押されず、平然と言った。

「また、てめえらかよ。今、告白しようとする最中なんだ。喧嘩の相手なら後にしてやるから。」

すると、不良グループの一人が言った。

「へっ！よく言うぜ。誰がそんな男女に告白されて相手にするかよ。」

ところが、その不良グループの一人が言った言葉は禁句だった。

「あゝあ…言っちゃった…」

友達があっけにとられて言う。

「てめえら、今なんていった？」

「だからお前みたいな男女…」

不良グループのリーダーが言おうとしたとき、一秒もたたないうちに由香里はそのリーダーを殴った。一撃でリーダーは倒れこんだ。

「うわぁっ！」

「…てめえら、あたしの好きな人の前であんなこと言ったからには、きちつと責任をとってもらうぜ？」

「バキバキッ！」

由香里は指をならした。

「ひえええつつっ！」

「じよ、上等だ！さつさとかかってきやがれ！」

不良グループが構えをすると…

「いいのかな？そんなこと言っちゃっても…？」

と由香里が不吉な笑いを浮かべた。

「バキッ！」

「うわぁぁぁっ！た、助けて。」

もはやほぼ、学校の不良グループを全滅させた由香里は不良の一人に近づいた。

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい！もうしません。」

由香里のあまりの気迫に不良はちびりながら、泣き喚き、サツと立って、行ってしまった。「おとといきやがれてんだ。…あ、それはそうと、高原先輩…」

ところが高原先輩は由香里が不良グループを全滅させた姿に啞然としていた。

「あたしと付き合ってください。」

由香里は笑顔で言った。すると…

「…ご、ごめん…俺、君みたいな男前な女の子とは付き合えない…」「ビシッ！」

そのとき由香里の心は固まった。

昼休み、校長室に呼ばれて…

「佐倉くん…今日でこの学校で起こした暴力トラブルは何回目かね？」

と聞かれた。

が、もはや由香里は放心状態だった。

「…あゝ？何回目でしょうか…私にもわかりませんね…ハイ…」
「そうか…今日で四十九回目というのは知っているかね？」

「いえ、五十九回目です。」

由香里が笑顔で言った。

「あ、そっかそっか。アハハハハ…」

校長は頭をポリポリとかいた。

「そうですよハハハ…」

校長室にあたたかい空気がながれこんだ…と、思いきや…

「佐倉くんっ！」と校長は机をバンツとたたいた。

「君はこの問題をどう思っているのかね。ああ、このままでは学校

のメンツが潰れてしまう…そうなったときはこの学校は…」

由香里は

「どうとも思っていないせん。」と笑顔でうなづく。

「そうかそうか…」

校長は笑顔で言った。再びあたたかい雰囲気の流れ込んだと思いきや…

「アハハハハ…佐倉君…」

「アハハハ…なんですか？」

「君…退学…」

「…え？」

由香里は笑顔のままで聞いた。

「今、なんて…？」

「ハア…とうとう退学か…」

由香里は家路を歩きながら言った。

「どうお母さんに説明しよう…」

由香里の不安も虚しく、とうとう家のドアの前に立ってしまった足…

「…ただいま。」

思い切ってドアを開けるとそこには笑顔のお母さんの姿があった。

「お帰り由香里。」

テーブルには色とりどりの料理が並べられていた。

「どうしたの？これ。」

「あのね、今日お母さん、人気の和菓子屋スイートのお餅買いに行った帰りに「ご近所で綺麗な人」って噂されているってお隣の小川

さんから言われて…それで有頂天になってお餅あげたのよ」
由香里の頭の中では

（ああ…あの人、近所でも話し冗語って言われているくらいだから…）

と言っていたが、口にはださなかった。

「それで気分がいいから今日の夕食は特別よ」

と大きなチキンをオーブンから出しながら言った。

（まったく、アメリカのクリスマスパーティーじゃあるまいし…それよりあのこと言わないと…）

「あのね、お母さん…」

「何？」

「今日、学校退学したの。」

「…え？」

由香里のお母さんは耳を疑った。

「まさか…本当に退学になるとは…」
テーブルの料理を目の前にして辺りには気まずい雰囲気の流れている…

「まったく、由香里の男らしい性格って一体、誰に似たのかしら…」
カツとなった由香里は席を立て、言った。

「悪かったね。でも、あたしが男前みたいな性格になったのは好きでなかったんじゃないもん。」

そういつてパンツとドアをしめた。

「由香里！」

由香里の母親が由香里を追おうとしたとき、電話が鳴った。

「…まったく、どうしてこんな時に…ハイ？」

不機嫌そうに電話にでた由香里の母親の顔がみるみるうちに青白くなってきた…

「由香里！由香里！大変よ！」

ドンドンとドアをたたく母親の声。

「うつさいな、今一人にさせてよ。」
すると…

「今それどころじゃないの、大変なの。いいからここをあけてちょうだい。」

はあと深々とため息をつくとき、由香里はドアを開けた。

「一体何？」

由香里の母親は真剣な顔で言った。

「お、お父さんが…お父さんが…海外出張先のロサンゼルスで事故にあって危険な状態に…」
「…え!？」

「今、手術をしているみたいだけど…直接ロサンゼルスに行かないとちゃんとした状態がわからないってお医者様が…」

由香里の母はハンカチで顔をぬぐって泣き始めた。

「お母さん…」

「どうしましょう…由香里には新しい高校探しもしなくちゃいけないし、しばらく家をあけとくわけにも…」

するとお母さんの頭にピンとひらめきがでてきた。

「…そうだわ…由香里を親戚に預ければ…」

「親戚…？」

由香里は顔をしかめた。

『いい？今度の学校では前の学校みたいに絶対にハメはずしちゃうよ。』

お母さんの言葉を思い出し、由香里は地図の通りに学校に向かった。
『まず、学校に挨拶に言つて、親戚の家には帰りでいいから。』
といわれた…

「まさか、子供を親戚に預けて自分だけロサンゼルス海外に行っちゃうつて…」

そういつて顔をあげたとき…なんと大きな豪邸のような学校が由香里の目の前に広がった…「…今…あたしは…夢を見ているのか…？」
目頭をおさえたり、頬をひっぱったりしているとき…
後ろから

「キヤア〜！雄基様〜！悠弥様〜！」

と黄色い声が響いてきた。由香里はその集団に押しつぶされた。
押しつぶされた由香里が目にしたのはかすかに二人の男子が立っていた…

「いてて…なんだよ…」

立ち上がるうとするが、擦り傷を覆っていた…

「いたっ…」

そのときスツと由香里を抱き上げた一人の男子生徒がいた。

「大丈夫？」

男子生徒はニツコリと笑うと由香里を立たせて、行ってしまった…

（…うわぁ…綺麗な…顔…）

保健室では…

「いててててっ！」

「我慢しろ。…つたく、それにしても入学早々こんな怪我をするなんて…」

保健室の先生が救急箱をしまいながら言う。由香里はさっきの男の子をふと思い出した。

由香里の顔はますます真っ赤になっていく…

保健室の先生はガーゼを由香里の膝に

「ビタッ！」

とくつつけて

「お大事に！」

と言った。

「うぎゃあっ！」

由香里の悲鳴がとどろく…

保健室のドアを閉めながら由香里は考えた…

（もしかしてあの抱き方って…）

（お決まりお姫様抱っこ！？）

と顔をますます赤くさした。

「…なんだろ…この気持ち…」

由香里の心臓がバクバク言う…

教室に向かう最中…

由香里はある女の子がハンカチを落としたことに気付いた。

「あの、ハンカチ落ちたよ。」

由香里が拾うと女の子は気がついて、

「ありがとう。」

と笑顔で言った。

（うわぁ、かわいい。お人形みたいな顔…）

「今日からこのクラスに入る佐倉由香里だ。」

先生が紹介すると由香里は

「よろしくおねがいします。」

とお辞儀をした。

席に座るとなんとあの男の子が左の端っこにいた。

（わぁー！）

そして前にはあの女の子がいた。

「お前…じゃなくてあなたもこのクラスだったの？」

「うん。」

「あたし、白雪乙葉。よろしくね。」

と笑顔で言った。由香里も笑顔で言う。

「よろしく。あたし佐倉由香里。」

と、由香里は一番左の席の端っこにある男がいたことに気付いた。なぜか由香里はその男のことが気になった…

由香里が廊下を歩いていると…

「ちょうどよかった。これ職員室までもっていってくれ。」

と先生にプリントの山を渡された。

「ちえっ。」

手渡されたプリントの山を運びながら由香里はよろよろと歩いていった。

ところが運悪く窓が開いており、強い風がビュウッ！と吹いてプリントを吹き飛ばした。

「あゝ！プリント！」

と、あまりにも由香里は窓に身を乗り出しすぎたせいか、由香里は窓から落ちてしまった。「ギャアゝ！」

下にはある男子生徒がいた。

男子生徒は上から何かが降ってくることに気付いた。

「ん？」

と、いきなり由香里が落ちてくるものだから男子生徒はびっくりして声をあげた。

「うわああゝ！」

「ドスンッ！」

気がつくとも由香里の膝には男子生徒の顔があった。

「あれ？膝あたっちゃった？ごめんごめん。」

ところが男子生徒は…

「…いいか？あと十秒以内に俺の顔からお前の膝をどかさねえと殺すぞ？バカ女。」

と声がした。

「バカとはなんだ！そのまるで人がまともそうじゃない人間そんな言い方は。」

由香里はそれに応戦した。

「どこの世界に空から降ってくる女がいる?!」

男は怒って、由香里を怒鳴りつけた。

「んだと…?」

すると後ろから乙葉が

「由香里、一緒に帰ろう。」

と声をかけた。

「あ、いいよ!」

由香里はその間際、男にむかってあつかんべえをした。

「オイ！これどうするんだよ!」

男は回りにまかれたプリントを手にして言った。

「…ったく!」

「…ったく。あいつなんだよ…ちょっと顔がかっこいいからっていい気になりやがって…」

由香里はブツブツと男の悪口を言いながら乙葉と帰った。

「ねえ。それってもしかして…」

乙葉が何か言おうとしたとき、分かれ道に分かれた。

「あ、じゃあ、また明日。」

「うん。」

地図に書かれたとおりの道を進んで…

由香里が顔をあげたとき、また目の前に豪邸のような家が現れた…

「今日は奇妙な日だな…」

そういつてインターホンを鳴らすと…

「ハイ？」と聞きなれた声が聞こえた。

「あの…今日からここに居候する佐倉由香里と申しますけど…」

『あ、ハイ、今あけます。』

しばらくすると門が自動的に開いて中からあの優しい男の子が現れた。

「あ、親戚の由香里ちゃんって君だったんだ。」

「あ…ど、どうも！」由香里はお辞儀をした。

「まあ、中へはいつて。」

お茶を入れながら男の子は「俺、陣内雄基。よろしくね。」と自己紹介をした。

「雄基でいいから。」

「うん…」

と、そのとき、ドアが開いた。

（また、誰かいるのかな…？）

「兄貴、俺のクッキー知らねえ？」

なんとドアからはさっきの由香里に怒鳴りつけた男がいた。

「アア〜！お前は！」由香里とその男は同時に言った。

「あれ？二人とも知り合いなの？」

「知り合いも何もこいつ！」二人が同時に言うと言は「真似すんな！」と怒鳴りつけた。

「そつちだろ！？」由香里も応戦した。

「こいつが俺の弟の悠弥。」

「どうぞよろしく。俺もこんな男前な人と居候できるなんて最高だよ。」悠弥はいやみつたらしく由香里にお辞儀をした。

「こちらこそ。あたしもこんな性悪な男と一緒に居候できるなんて光栄だな。」

二人の目に火花が飛び散る。

「ここが君の部屋だよ。」雄基に案内されて由香里は言った。「うわあ、すごい広い部屋。」「ここ、好きなだけ使っていいから。」

雄基は笑顔で言った。

「じゃあ、お言葉にあまえて。」

悠弥はそれが気に入らなくて仕方がなかった。

「お風呂沸けたからよかったですね。」

「はい！」

やけに雄基には素直な由香里だったが…悠弥と目を合わせると…

「ふんっ！」

とそっぽを向いた。

由香里が風呂に入ろうとすると…なんと風呂があまりにも広すぎて、由香里は腰をぬかしてしまった。

「なんじゃこりゃあー！」

風呂につかりながら由香里は辺りを見渡した。

ライオンの石造の口からでるお湯や、立派な大理石の床と壁…

「とんでもないことになっちゃったな…」

と…そのとき、ドアがあいた。なんとそこには腰にタオルをまいた悠弥の姿があった。

「ぎゃあ〜！ヘンタイ〜！」

「ゴチャゴチャやるせえよ。なんでお前がここにいるんだよ。」

悠弥は顔を赤くして言った。

「お前こそなんでここにいるんだよ！」

由香里が聞くと…

「いつもこの時間は俺が風呂に入る時間だからだよ。」

「別にお前のない胸なんか見たって興奮しねえよ。」

悠弥はフツと鼻で笑うと由香里はカツとなった。そして…「バシャッ！」とお湯をかけた。「なにしゃがる！」「フンッ！」

風呂から出るとテーブルにはなんとありとあらゆる高級料理がならべられていた。「うわあ。これ全部雄基が作ったのか？」

「まあね。」「普段どこういうの作るんだ？」

「まあ、エスカルゴとかムニエルとか…」

「へえ。やっぱり雄基は誰かさんと違ってすごいな。」

由香里はわざと悠弥の方に目をむけた。

翌日…由香里が登校しようとしたとき…悠弥と由香里は肩がぶつかった。

「ふんっ！」お互いがそっぽを向くと雄基は「二人とも仲がいいな。」

「と言った。」

「よくない！」二人は同時に言った。

「まったく、あいつなんなんだよ…」由香里が乙葉と一緒に登校しながら言うところには高原先輩が由香里とばったり会った。

「やあ。」

「はあ…」

高原先輩は由香里よりもかわいい彼女を連れて歩いていた。

「…」由香里の心はズキンと痛んだ。

「どうしたの？誰？この子…」

「ああ、前の学校で俺に告白してきた子。」

と、彼女は「もしかして彼女のこと好きなの？」と聞いた。

高原先輩は「そんなことないよ。あんな子、女の子らしい雰囲気もなければ、センスもない男みたいな子だよ。」

とあわてていった。その言葉に由香里は言葉を失った…するとこの前の不良グループが歩いていった。「よお。もしかしてこの前の男女か？」「お前、もしかして星羅学園通ってるの？うわあ。よくお前みたいな男女がそんなお嬢様学校入れたよな。」

「それはそれとして、この前のお返し、キツチり返してもらおうか？」

不良グループは由香里に襲い掛かってきた。由香里はさっきの言葉がショックで喧嘩をする気力もない…

と…「バキッ！」と誰かを殴る音がした。それは雄基と悠弥だった。

「雄基！悠弥！」雄基と悠弥は由香里よりも強かった。不良グループはすぐにその場を立ち去って行った…

「すげえ…」

雄基は由香里に近寄ってきた。「大丈夫？」と、雄基は優しく声をかけてくれた…

そのとき…悠弥は高原先輩に近寄ると…手を「ギリッ！」とねじりあげた。

「いてっ！」

すると、悠弥は高原先輩を「ギロツ！」と睨みつけると…「悪いけど、女一人守れねえ弱虫のお前にコイツのことひどく言う権利なんかねえし、お前なんか俺に比べたら全然ルックスもセンスもないしかつこよくもないから。」

そして悠弥は高原先輩の彼女に近づくと…

「お前もこんなろくでなしと付き合っていないで、さっさと別の男捜せ。」と顔を近づけた。

高原先輩の彼女は悠弥の顔に一目ボレして…

「ハイッ！今度はあなたの彼女にしてください。」といった。

「え！？君、どうして…」すると高原先輩の彼女は…「悪いけど、あんたみたいなブサイクで最低男、いらなから。」と残酷な言葉を吐き捨てると行ってしまった…「そ、そんなあ…」

悠弥のその姿に由香里は…

「ありがと…」と一言言った。

「へっ。今度はちゃんとこっちに迷惑かけないで喧嘩しろよ。」といった。

「な…なんだとっ！」

早速二人の喧嘩が始まった…

「さ、行こう。」

雄基が声をかけた。

「…うんっ！」

由香里はこのとき心の中で、

（この二人でならきつとどこまでもいけるかも…）と初めて思った…ところが、由香里の影に忍び寄る黒い影が由香里の運命を変えるこ

とは思ってもしなかった…

二話へ続く

第一話男前女子高生、由香里、聖星羅学校入学します（！？）（後書き）

どうでしたか？

「みるくここあ」は…

実はこのネタ、最初由香里がとび蹴りする部分はあたしの親友からもらいました…

で、そこから手をくわえてみたんですが…

それはさておき、第二話ではなんと由香里と学園の生徒会長が対決！？

それは第二話のお楽しみです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384b/>

みるくここあ

2010年10月21日20時53分発行